

乳幼児の肌着専門メーカー 株式会社丸茂繊維

とっておきの一枚をつくり続けて

中村の地で一業90年 時代に合わせた商品開発

2013年に創業から90年を迎えた丸茂繊維。3代目社長、近藤幸生さんの祖父母が二人で始めた。当時は隣の西区で繊維業が盛んに行われていた。中村区にも数軒の同業者があったという。

初代、茂右衛門は、1923年8月15日、兄から借りた4千円を資本として4台のメリヤス機械を購入。そして丸茂繊維が誕生した。関東大震災の半月前のことである。メリヤス編みとは糸を輪の形にしたわなの中に、次のわなを入れていき繰り返して布状にしていく編み方で、伸縮性に優れた布が完成する。当時、夫婦は二人で4台の機械を操業していた。9月1日に震災が発生すると、特需で通常の倍の量を生産した。3カ月半、毎日21時間も働いたという。「相当忙しく働いたと思います。うちの製品は高速で編むものではなく、時間をかけて少しずつ完成するものですから。大変だったでし

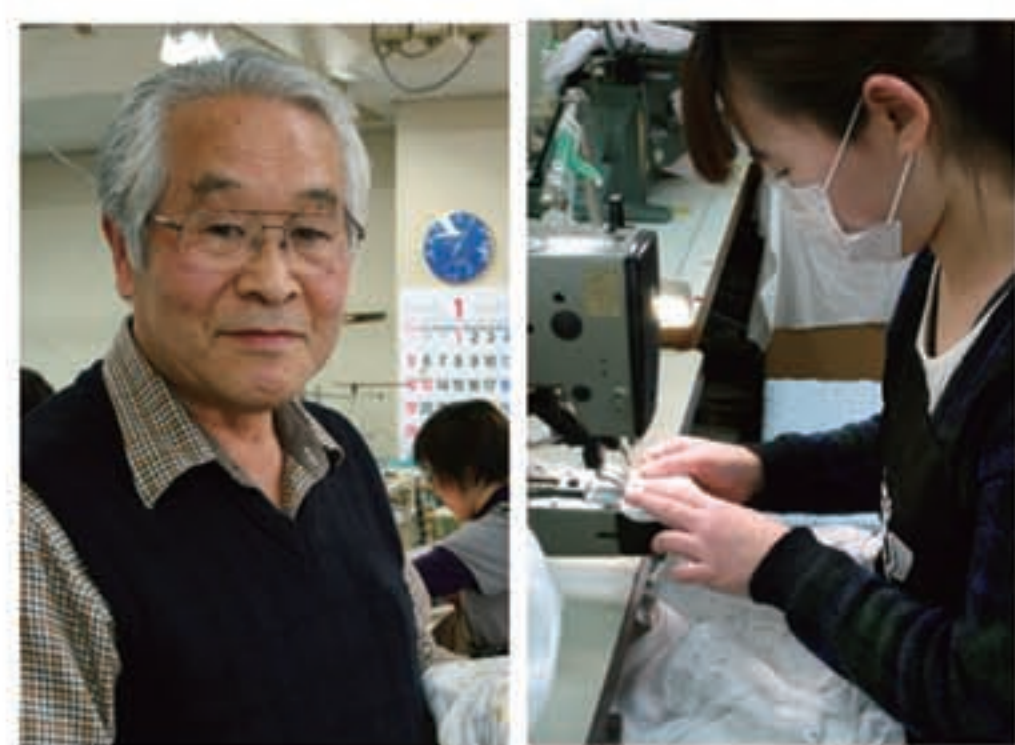
中村区道下町。3階建てのビルのなかで、たくさんのミシンからふんわりとした小さな肌着が完成していく。すべてが手づくり。赤ちゃんのやわらかい体を優しく包む商品は、贈り物にも重宝されている。創業90年の丸茂繊維を訪ねた。

ようね」と幸生さんは話す。

品質第一を心に、徐々に一貫生産に入り始めた1932年の春、茂右衛門が当時の得意先に同行して地方を回ると、そこで粗悪品と一緒に自社の製品が売られている光景を目にする。商品にランクつけがされ、用途別に売られていることを大阪のデパートで聞き、自社の製品にも欠点があることを知った。そこで、さらに品質にこだわるため商品の研究開発に3年のときを費やした。1932年といえ、第10回ロサンゼルスオリンピックが開催された年。ここで初代は、すでに先を見据えた経営を心に決めていたのだ。ついに得意先から「これならこの店に持つ

で行っても恥ずかしくない。あなたの言い値で買いますよ」という言葉をもらう。1935年、丸茂繊維の商品が東京の三越のショールームに入れられ、売り場を飾った。そこで楽しそうに商品を手に取る客を見て、初代は「私たちがつくっているもの、売っているものは、お客様の喜びなのだ。これからは商品を通して家庭に喜びと笑顔を届けていこう」と誓う。この精神は、今も引き継がれている。

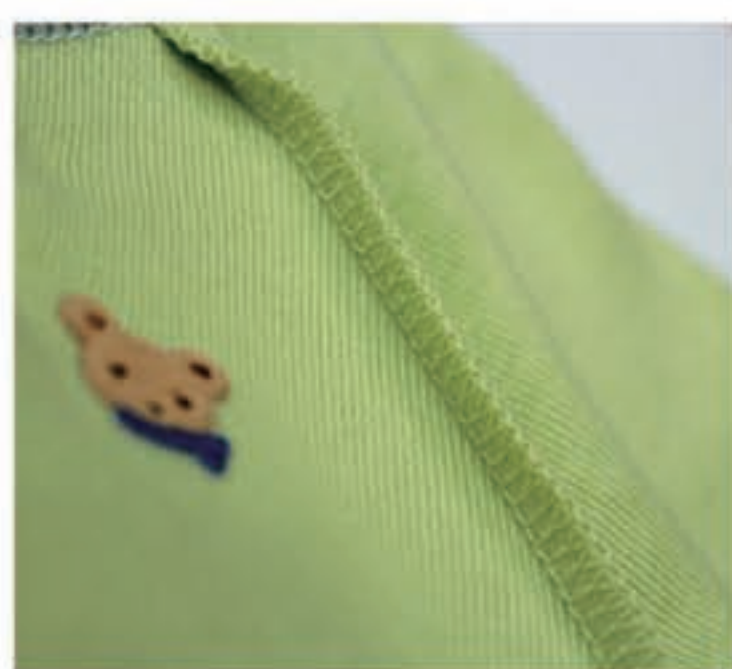
幸生さんの父、保さんが会社に入ったのは1958年、18歳のときだった。「当時は住み込みで20人くらい、従業員は全部で60人ほどいました。当日完成した製品を夜行列車に乗せ、翌朝東京にいる社員が受け取り、そのまま売り場に置く。そういった時代でした」と話す。贈り物として肌着が重宝された当時、東京の三越が取引先の主体であった。しかし保さんは肌着の置かれる場所がメインの売り



右) 伊藤真里奈さんは中学生のとき職場体験で訪れた丸茂繊維を気に入り、入社した 左) 50年もの長い間、丸茂繊維で働く天野鎮夫さん



カバーオール型肌着



赤ちゃんのやわらかい肌に縫い目があたらないよう、縫い目を表にする方法を日本で初めて取り入れたのはファミリアだった



ツーウェイオール(秋冬～春)

ツーウェイオール(春夏～秋)



打ち合わせ半袖肌着

場から地下へと移り、徐々に需要が減っていくのを目にするようになる。進物が肌着から食品へと変わり、時代の変化を感じ取っていた。そこで1985年、東京での販売をやめ、丸茂繊維は紳士、婦人物から手引き、ベビー用一本にしぼる。工場を現在の場所に新築し、30人ほどの社員と新しい一步を踏み出した。「大人用の製品では、自社の良さを生かしきれない。取引先であったベビーショップ『ファミリア』とも相談し、お互い、なくてはならない間柄になるよう頑張ろう!と決意しました」と保さんは当時を振り返る。



代表取締役 近藤幸生さん
「ものづくりに対する温かい気持ちをもった、すばらしい社員さんに恵まれています。誇りをもって、製品を作っています」

初代の教えを守り品質第一 社員とともに最高の一枚を

「厳しい祖父でした。私が物心ついたときには、70代。おもちゃを欲しがってばかりの私は、よく怒られましたね。当時は一線を退き、みんなの仕事ぶりを見てくれていました」と初代との思い出を話す

幸生さん。大学卒業後、神戸市にあるファミリア本社で働き、生産を管理する立場としての経験も積んだ。「店頭に立つて自分たちの商品が買われていく様子を見られたのは良かった。実際に使う人の顔を見て、ものづくりに対する考え方が構築されました」と話す。取引先を1社から3社に増やしたのも、幸生さんの代だ。

「これから、もっと医療関係にも進出していきたい。病気の子どもたちにとって少しでも負担の少ない肌着の開発など、我々ができることはまだあるはず」と力を込めて話す幸生さん。赤ちゃんに関わることで人や地域の役に立ちたい。この志のもと、社員が一丸となつてものづくりを続けていく。



昭和初期から変わらず使い続けている編み機



上) ささまざまなミシンを使ってそれぞれの工程を進めていく 下中) 手際よく、商品をパッキングしていく 下左) 目に見えるか見えないかほどの細かなほこりを、ピンセットで取り除く



company data
株式会社 丸茂繊維
名古屋市市中村区道下町1-31
http://www.marumoseni.co.jp/